国語教育学

国語教育科学史

飛田 隆

國語科學講座

—XI—

國語教育學

國語教育科學史

飛田隆

株式會社
明治書院

國語科學講座

— XI —

國語教育學

國語教育科學史

飛田　隆

株式會社
明治書院

目次

國語教育科學史

飛田隆

一　對象と方法

一　對象

存在としての國語教育現象は、歴史的現實の領域、事象的（敎室的）現實の領域、及び可能的領域において、夫々獨自の方法によつて研究せられることが出來る。これらの三つの研究領域に從つて、史的國語教育科學、分析的記述的國語教育科學、及び規範的國語教育科學が組織される。(一)故に、われわれは、國語教育科學史を問題とするにあたつて、同じく存在としての國語教育現象を研究對象としては居るが、併しその對象を秩序の異る領域にもとめると共に、その方法を獨自ならしめて居る三つの科學の歴史について語らなければならない。しかしながら、事實、國語教育現象の科學的なる研究は、歴史的現實の領域、事象的（敎室的）現實の領域においては、殆んどなされてゐないと云つてもよいのであつて、可能的領域における研究に比較するとき、僅かに一つの學的方向をもつたと云へるにすぎないであらう。從つて、國語教育科學の歴史は、國語教育現象の可能的領域における研究の中に、自らの姿を見出すべきである。この意味において、規範的國語教育科學の歴史こそは、まさに、國語教育科學史とよばれるべきものである。

（一）コトバ第一巻第一號所載、拙稿「國語教育科學の組織」參照。

われわれは、多くの文獻の中に、國語教育現象の歴史的現實の領域における研究をしばしば發見する。さうして同時に、事象的（教室的）現實の領域における研究をも處々に見出すのであるが、そして、それらは眞劍なる考察の結果であるけれども、しかし、科學として見るためには、その對象への自覺において、その方法の確立において、未だ黎明の域を脱し得ないものがある。それのみではなく、それらの研究は、夫々に一つの科學として組織を意圖されたものであるよりも、むしろ規範的なるものに含まれる所の强き要請によつてなされたものなのである。故に、それらの研究は、科學としての獨立を考へる以前に、規範的なるものへの段階として、一つの從屬的關係において考察されてゐたものであつた。かゝる意味において、國語教育現象の現實的領域における研究は、史的國語教育科學及び分析的記述的國語教育科學の組織にまで成長するときに、われわれの考慮の中に入れるべきことを公約することによつて、今は、われわれの國語教育科學の歴史から排除されなければならない。たゞ、それらが、われわれの前に姿をあらはすとすれば、それは、常に、規範的なるものに關係すると云ふ理由から許容せられた場合に限るのである。

國語教育現象の、可能的領域における研究が、科學としての性格をもち初めた一つの境界的記念碑は、實に「國語の力」（垣内松三教授著）であつた。規範的國語教育科學は、形象理論において、自らの姿を發見するのであつて、長き思索の結晶としてのこの形象理論は、大正十一年五月に、「國語の力」として、研究史の上に、又、國語教育史の上に、一大轉回期を劃しつゝ出現したことはあまりにも有名である。われわれは、明治大正昭和を通じての研究を二つに區分するとすれば、この時期を分割の一點として、黎明の時代及び科學の時代となすことが出來る。黎明の時代は、實

に苦闘にみたされた時代であつて、科學の時代の準備的階段の時代であり、科學の時代は、それらの諸研究を批判し、さうして内省し、學的なる努力を、民族の將來について語る國語教育研究の上にそゝぎかけてきた時代である。

かくして、國語教育科學史の對象は、この二つの時代を、一つは黎明期として、更に一つは科學の誕生成長期として、包含したものであるべきである。しかしわれわれは、このことを斷念しよう。なぜなら、黎明期は、科學史としてあつかはれるときに問題がすくなすぎ、研究史としてあつかはれるときに叙述が多すぎるであらうから、われわれは、更にこの二つの時代の聯關を徴細に考察する機會をもつであらう。われわれの研究對象は、從つて、科學時代の可能的領域における規範的研究の歴史となる。かゝる規範的研究こそは、規範的國語教育科學であるに他ならなく、規範的國語教育科學は形象理論においてである。

われわれは、「國語の力」以後の形象理論の主流をたづね、幾多の文獻を、その側に想起して、「形象と理會」（垣内松三教授著）にいたるまでの思索の展開をたどることによつて、國語教育科學史を叙述せんとするのである。

二 方法

國語教育科學史の對象が、以上の如くであるときに、かゝる對象の認識は、如何にせられるべきであらうか。一つの理論の歴史を知らうとするのであるから、われわれはまづ、かゝる理論がわれわれの前にあらはれるために必要なるものをもたなくてはならぬ。それらは、あるときには單行本としての文獻であるであらうし、又雜誌論文であるでもあらう。更には、一つの傳承的なるものとして、學徒の記憶に保存せられてゐるものであるかも知れぬ。そ

れらは樣々なる姿においてあるであらう。さうして、それらが、われわれの前に蒐集されることも困難ではない。ただ、われわれにとつて問題となるのは、かくの如き「必要なるもの」をわれわれの前に持つたとき、國語教育科學史の叙述者として、われわれは如何なる點に立つべきであらうかと云ふことである。もしわれわれが、文獻等の「必要なるもの」について、それらが刊行され或は發表された時間的前後を考慮する心のみから語るとすれば、そこに生れるものは恐らく單なる全集的なるものとなつてしまふであらう。一つの全集は、科學としての歷史と呼ばれるには、あまりに自然的でありすぎる。全集は、それがすべてを時間的考慮のもとにのみ配列したものである限り、その意圖において、何等歷史と稱すべき心構へを見ることが出來ない。眞の歷史は、かゝる全集のうちから更に汲み出されてつくり上げられるものであるかに思はれる。全き材料から、然らば如何にして一つの歷史は構成せられるべきであるか、われわれは、この重要な問ひに答へることによつて、國語教育科學史の方法を決定しなければならない。

一つの歷史が、科學としての資格をもつてゐるときに、われわれは、そこにおいて、明瞭なる對象と、確然たる方法とを見出すことが出來なくてはならない。かくの如き對象と方法とは、眞實なる意味において、如何にして決定されるのであるか、一つの對象とそれの硏究方法とが、われわれによつてとりあげられるのは、それが、われわれによつてとりあげられる何らかの理由をもつからであつて、この限りにおいて、對象と方法の決定は、その根源を「われわれにとりあげられる理由」にもつてゐる。「われわれにとりあげられる理由」は、云ひかへれば「われわれがとりあげる理由」である。

もし、さうであるとすれば、われわれは何故に、かくの如くとりあげるのであらうか。このわれわれ自身の問ひは、

人間のもつ一つの根本性格を凝視することによつて答へられるであらう。あらゆるものが、それが人間によつて關心されるものであるときに、われわれにあたへられたる根本性格としての缺如性に關係してゐる。缺如的なる中間者としての人間は、當然一つの不安の中に居るのである。人間において、不安は統一への運動の原動力であり、不安は絶えず調和にもちきたされることを要求する。卽ち、われわれ人間は、一つの不調和を十全性にもちきたさんがためにのみ、關心的なる配慮をもつ。學問もさうであり、その他の關心も亦さうである。かゝる人間に對して「對象と方法」がとくに選定されるとしても、それは、この原理にそむくものでは決してなく、むしろ、この原理の實證である。さうして、われわれの不安は、たゞ單なる不安としてのみあらはれる場合が往々にしてある。不安に一定の對象のないことがある。かゝる場合に、關心は無限の方向にひろげられる。併し、更に一つの他の場合がある。それは、不安が特殊の對象をもつ場合である。一つのことに對する不安である。かゝる際の不安は、關心の方向が自ら一定する。さうして、二つの場合は、關係をもつてゐる。一定の對象のない不安は、常に、對象のある不安を誘導するものである。かくして、人間の根本性格としての不安は、特殊の對象をもつにいたる。特殊の對象が不安の對象となるとき、人間は、それをもつとも確實なる仕方において統一せんとする。調和に導かんとする。こゝに科學が誕生する。

かくの如く考へてくるときに、われわれは、科學の誕生を根據づけることが出來る。科學は、一つの不安の産物であるばかりではなく、對象なき不安が、一定の對象ある不安を誘導した際の産物であると云へる。對象ある不安は、常に一つの問題をもつてゐる。故に、科學は問題をもつ。常に少くとも一つの問題をもつてゐる。さうして、この問題こそが、科學の生命であるべきである。故に、科學は、科學としての使命を果すために、その問題は純一である。

問題が純一であるが故に、科學は、深さをもつことが出來、本來の使命を果すことに近づきうるのである。

われわれが、科學をとりあげること、云ひかへれば「對象と方法」とをとりあげることの理由が、かくの如くであるときに、一つの科學は、常に問題をもつてゐるべきであることが、明瞭に結論される。從つて、われわれの當面の問題であるこの一つの歴史も、それが科學的なる立場に立つ限り、必ず問題をもつて居るべき筈である。かゝる意味において、國語教育科學史は、問題史としてのみ存在することが出來る。國語教育科學史のもつ問題は、然らばそれの眞の姿において何であるであらうか。

われわれが、存在としての國語教育現象について語るとき、われわれは、ある一つの精神に從ふ所の國語教育が可能であると云ふことを前提してゐる。ある一つの精神、云ひかへれば一定の國語教育精神に從ふ所の國語教育の可能は、更に、二つの意味において理會の可能を前提してゐる。第一は、他人の理會の可能であり、第二は、あたへられたる表現の解釋としての理會の可能である。第一は、國語教育における教室内の、生徒と教師との問題であり、教師の生徒についての判斷の根柢に關する問題であり、第二は、教材の解釋に關する問題である。何れも、然し、理會の問題に屬するのであつて、「汝の定立」の問題に接續して起る問題である。――有名なる哲學者でさへも、「汝の定立」について論ずることを忘れたために、彼の哲學は無自覺であるといはれてゐる。國語教育の研究においても「汝の定立」の問題は、とりあげられてゐなかつた。それが問題として取りあげられたのは、ごく最近のことに屬するのであつて、哲學の傾向が然せしめたと云つても過言ではない。――故に、「汝の定立」とそれに接續する所の「理會」の問題とが、一つの精神に從つてなされる所の國語教育においての根本的なる問題である。われわれは普通に、一つの確

立されたる國語教育精神があつて、それに從屬する所の國語教育の理論があり、理會の理論があると考へてゐる。然し、事實は反對であつて、一つの國語教育精神の確立もしくは認知は、理會の可能を前提としなくては不可能なことにぞくするのであり、更により根柢的には、「汝の定立」の可能を前提としなくてはすることの出來ないことである。故に、われわれは、かゝる考へ方から離れて、一つの新しき道をとらなくてはならない。即ち、「汝の定立」と「理會」との問題を中心として考察することによつて、それを前提として國語教育の精神は何處に如何やうに求められたか、國語教育の方法は如何に組織されてきたかを史的に研究するのである。こゝに「理會」は、「汝の定立」を前提とすることを確保することによつて、「汝の定立」と「理會」とを一括して、「形象」と「理會」との關係を見出し、この「理會」の可能と云ふことを中心として史的考察を進めるときに、形象理論において、この問題が如何樣に研究されてゐるか、さうして、如何なる展開をもつてゐるかが明瞭にせられるであらう。從つて、現在の形象理論の主張が、そのあるがまゝの姿においてわれわれに把捉せられる日を早からしめることとなるであらう。われわれは、かゝる史的考察の間に、常にそれと聯關して語られる所の國語教育の精神について、それが形象理論においては如何に語られて來たかをも知らうとする。と同時に、この問題の當然の結果としての國語教育の方法の組織が、形象理論において、如何にあり、如何に伸びて來たものであるかをも研究しよう。かくの如くしてなされる所の國語教育科學史は、可能的領域としての明日の世界について語る際に、一つの力となると思ふ。

かくてわれわれは、國語教育科學を問題史的に叙述せんとする。さうして、その中心の問題は、實に「形象」と「理會」との關係である。

二　問題史的考察

一　問題の提示

1

「今日、我々は讀むことに就いて少しも驚異を感じない。したがつて、その作用に就いて考へて見る心も起らないほど日常のことであるが……。」これは「國語の力」の初めに記された一節であつた。一見平明なこの叙述は、讀むことに對するひとびとの關心を、極度に强く喚起した叙述であつて、この中に用ひられた「が」は、實に解釋學の建設、更にひろく、形象理論の確立に展開する原動力を含んでゐた。大正十一年三月三十一日の序文を持つて、五月に世にあらはれた「國語の力」以後の形象理論の展開の姿を、その流れに沿うて辿れるひとは、一つの「が」に内具せられた「力」の發展性に驚くであらう。もしひとが「國語の力」（大正十一年五月）より「形象と理會」（昭和八年四月）にいたるまでの思索を凝視するならば、學問のもつ嚴粛さを、あらためて最も强く感じさせられるであらう。「よむ」ことについての研究は、こゝにはじめて開始したと云つてよく、ひとはそれまで、「讀むことに就いて少しも驚異を感じ」てゐなかつたのである。「よむ」ことについての驚異を持たなかつたばかりでなく、「汝の定立」「理會の可能」についての關心さへも持たぬ素朴的なる、しかも不安定なる長き歩みをつゞけてきたのである。

われわれが、一度われわれの本心に立ちかへつて、「いつまでもこんなことをして居てよいのか」と自らの心に問う

て見るなら、「よむ」といふこと、「解釋」といふこと、「理會」といふことが、新しき問題としてせまつてくると同時に、それらの問題の奥に、更に一つの問題が見出されてくる。ディルタイは、特殊なる認識の方法について考へたといはれてゐる。しかも、ディルタイの哲學が無自覺であつたといはれるときに、われわれは、この深奥の問題について、新しき思索を試みなければならないのである。深奥なる問題、それは云ふまでもなく、理會せられるもの、解釋せられるものとしての「汝」が、如何にして定立されるかと云ふ問題である。常にわれわれに、われわれの背後にあるものとしてのみあらはれてくるものを、眞の「自我」であるとするとき、背後にあるものに現象するもののうちで、對象化せられたる意識、對象化せられたる自己の身體にあらずして、われわれの理會を要請する所の「汝」としてあらはれるもの、このものは、如何にして客觀性をもちうるものであるかと云ふ問題である。

「汝の定立」は、「理會の可能」を要請する。理會を可能ならしめる認識方法の眞の研究は、きはめて廣き領域において、精神科學的なる學問の姿をかへてあらしめるであらう。特に國語教育の世界においては、かゝる問題に沿うての思索が、たゞひとり、國語教育における規範的なるものをつくり出すことが出來る。また、歴史的に、さうであつたのである。

「汝の定立」「理會の可能」が問題としてとりあげられるとき、こゝに、國語教育の精神が眞に問題とされ、その精神に從つての國語教育の方法が、學的に研究され、確立されてくる。國語教育の方法の研究は、再び「形象と理會」を中心課題としてもつのである、故に、「形象と理會」の問題をうちにもつ所の形象理論の問題は、國語教育を貫くところの問題なのである。

われわれは、か丶る意味において「國語の力」（大正十一年五月）と「形象と理會」（昭和八年四月）とを一線の上にもち來さうとする。そこから、形象の機構と理會の機構とを、史的に、發展の姿において、われわれの前にあらはれしめようとするのである。このことは、國語教育科學の誕生以後の姿をみつめつゝ、その歩める道を辿ることである。

かくの如くするために、われわれは、形象の機構の研究と、理會の機構の研究とを、二つのものとして、史的に扱ふことがよき方法であると考へるのであるが、しかしさうすることによつて、互ひに離れることの出來ない關係において論ぜられて來た形象と理會とに關する、生き生きした思索を見逃すことになりやすいと思ふから、むしろわれわれは、それらの研究が進行するそのまゝの姿を見つめて行くべきであらうと思ふ。けれども、このことは、何らかの仕方において、常に復歸してゆくことの出來る中心を持つてゐなければならない。その中心が、「形象と理會」の問題であることは勿論であるけれども、「形象と理會」の研究を史的に考察するためには、更に一つの中心的基準を置くことが必要である。そのことは、われわれの思索が、聯想的なる彷徨を開始せんとするときに、——それは屢〻あるのであるが——この混亂を救つてくれることになるのである。

もしさうであるとすれば、われわれの當面の中心を何處に求めるべきであらうか。「汝の定立」が問題とされ、さうしてそれが論じつくされたときに、云ひかへればそれを前提として、「理會」が問題とされるのであるから、「理會」が問題とされるときには、理會の對象としての「汝」の中に、單なる表面的なるものではなしに、奥深き内面において何ものかが豫想されなければならない。それが、「汝」の表現作用であるかも知れず、又それとはちがつたところの、理會者のもつあるものであるかも知れない。しかしそのことは、形象と理會とに關して、同一性を考へることによつ

て後にとりあげられてゐるから、今それについて語ることを止めよう）かく考へるときに、表現されたるものとしての符號――それは、音聲であることもあるし、文字であることも、又その他であることもある――と、その内面に輝く所のものとの二つについて、われわれはその關係を考へることが出來る。故に、今その符號をｂｃを以てあらはし、内面にあるものをａを以てあらはして、最も素朴的なるものとしてａｂｃなる圖形を得て、これを、われわれの思索

の常に復歸し、それにおいて論ずべき中心的なるものとすることは、史的展開を研究する際に、一つのすぐれた方法であると考へられる。さうして、實に、この圖形は、他の意味において、形象理論の展開の初期に、しばしば用ひられた所のものなのである。

かゝる立脚點から出發するときに、われわれは、混亂の恐れを抱くことなしに、文獻の中に入りこむことが出來る。

2

「國語の力」が世に出た理由は、樣々にいはれるであらうけれども、その序文の語るところによれば、この書が世に出たとき以前「二十餘年の間、一人で考へもし行つても來たこと」を、「どうしても話さねばならぬところまで追ひつめられたから話さねばならなかつたので、全くとりかへしのつかぬことをしてしまつたので」その責任を明かにするために書かれたものであつた。追ひつめられて話したといふその講演は、本書の附錄として「國語教授と國語教育」（大正十年十一月二十日、長野縣師範學校に於て）の中に收められてゐる。

この意味深い一つの講演は、多くの問題を内に含んで居る。われわれは、この講演が「國語の力」の誕生を促した

といふ意味において、これに觸れて見る必要がある。その中で、「形象と理會」が、如何に關心されてゐるかを一瞥しよう。

この講演は、(1)教材研究に關する考へ、(2)教授の作用が及ぼす結果に關する考へ、(3)教授法、の順序によつてなされた。

こゝに、教材研究は、メトドロギー又はクリチシズムを意味してゐるのであつて、この點から、理會の技術としての解釋の問題に入つてゐる。此處においては、文學の研究の在來の態度を批判して、「『批判の批判』」の上に一道の光を投げるもの」を求め、それは「文學の本質を探求する考へから導かるゝ考へ方」であつて、文學の美學的批評は、「主觀的な美學の學說を依據として、獨斷的に文學を批評することではなくして、時と處とを超絕して永遠に亘る文學の妥當性の思惟の上から、文學の本質を明かにする探求である」と考へて、かゝる考へ方から、內容と形式の問題にふれ、內容・形式を並存的關係に立てたために起れる國語教授の混亂を指摘して、「こゝに『意味』といふ語で現はした表象を產出する作用を更に作者の人格の深い內面的統一に於て求むる欲求の前には、この如き內容は內容といふべきものでなく、又形式といふものでもないのであるから、さうした根據の上に立つた國語教授法論は根柢から崩壞してしまはねばならぬ。」といつてゐる。このことは、表現面における形式的なるものとその奧にひそむ所の內容的なるものについての考へ方を、根本から破壞した言表であつて、今日の國語教育における中心的なる問題は、こゝに既にのべられてゐたのである。內容形式について「作者の人格の內面に、それを表出せねばならぬ已むに已まれぬ欲求があつて、言語を藉りて表現せられる文學の內容・形式といふものは、並存的でなく、人格的生命の表現せられる作用

の連續である」とし、内容は形式であり、形式は内容である所の作品において、文學の本質を見つめてゐる。

この内容形式の問題は、後に、象徴形式として更に深く論ぜられる。そこには、カッシーラーの哲學が顧慮せられて「形象と理會」の問題の一つの中心的なる位置を占める問題が展開されてくるのである。

生産點としてのaに於ける直觀は、表現面としてのbcにおける表現との間に何の隔りもなく、たゞ「即」の一字を以て連結せらるべきであつた。このことも、幾多の問題を、そこに生み出すのであるが、今は、それに觸れずに、更に原文に沿うて考へて行かう。

國語教授の結果の見方において用ひられてゐる所の、一分間の讀方速度の測定が、A地方二五〇字――二七〇字、B地方二七〇字――三一〇字、C・D・E地方、二七〇字――二八〇字としてかゝげられてゐるのは、今日における分析的記述的なる國語教育科學に深き關係をもつものである。

教授法の問題においては、講讀に際して教授の初めに現はれるものは、生徒の通讀であつて、その上にあらはれる所の、生徒がその教材に對してもつてゐる或程度の理解が教授作用の生ずる起點と考へられ、教授作用の全局の上に關聯するものと考へられるといひ、よく豫習された通讀は、それによりてその學級の生徒全體の心に、作者がその文を書かうとしたときの「産出點」を生かしてくれるといつてゐる。そして更に、エルチェの研究法に見える單語から内容までを通り越して、直ちに或る程度まで作者の表現しようと企てた内容から出發して、その表現の作用を跡づける作用となることが出來、かやうによく豫習された通讀から出發するとしたら、こゝに修辭的・文法的單語の解釋も、すべてその態度が變つて來て、始めてそれぞれの自然なる立場に立つことが出來るのであるといつてゐる。

こゝには、豫習それ自體でさへも、通讀から出發すべきであると明言されては居ないが、文からの出發が、やがてはそこにまで展開してゆく見通しをすでにもちうるのである。

作文教授においては、クローツェの美學の原理となつてゐる「表現即直觀」の思索を批評することから進められた考察の結果は次の如くである。――表現即直觀の「即」に統一される兩面の奥に、これを統一する個性の意志がある。纒めるに就いて、表現するについて、必要なる知識も感情もこゝに合一し統率される。これらの作用の作用は、作文の作用の根源の力であつて、コーエンがその哲學體系に於て說く根源の原理といふものも、この作用を明かにしようとしたものと考へられる。この「即」の內面に輝いて、文の內より內に連續する白金の一線のやうな光る心の力を錬ることが、作文の根本問題であるのではないかと思ふ。――かくのべられてゐるのを見るとき、われわれは、生產點としてのaと表現面としてのbcとを連續せしめる一つの「個性の意志」を知ることが出來る。しかし、この個性の意志が、直觀と表現とに對して、如何なる位置をもつものであるかは、こゝにはのべられてゐない。それは、或はカントの純粹理性批判において、直觀を槪念にもちきたすときに作用する悟性の如きあり方であるのかも知れない。それらは、形象理論自らに語らせなければならぬ。

最後に、國語教育の精神についての一つの重要なる記述がある。「我々が、國語教授の手續によつて國語教育の上に期待して居るものは、かやうな立場から、生徒の個性を覺醒しこれを生かして、文化意識を深め且つ高めることから、國民精神の總向上を希求するに外ならない。」この國民精神の總向上の問題は、民族精神の總向上として、形象理論において叫びつゞけられた問題であつた。以上を整理して、

(1) 内容と形式との問題への關心

(2) 文よりの出發

(3) 表現卽直觀

(4) 國語教育の精神

となすことが出來る。これを、われわれの圖形に對比して考へれば、ある意味において、立體的なる精神を素朴なる圖形に附加してゐるのである。

こゝに再び「國語の力」の序文を引かう「今後、部分的には改訂を加へることもあらうと思ふが、その根柢となつて居る精神は、どこまでも主張する考へである。」

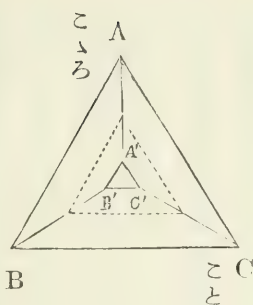
3

われわれは、われわれの圖形を、前章によつて定着せしめることが出來た。その機構を、更に究明してゆくためには、「國語の力」の「二、文の形」をよむべきである。この立體的なる思索は、それによつて秩序をあたへられてゆくであらう。

最初に、われわれは、有名なる一節の引用をなさう「雪片を手に執りてその微妙なる結晶の形象を見んとする時、温かい掌上に在るものは唯一滴の水である。文に面して作者が書かうと思つたものを捉へようとする時、もし文字に泥むならば、そこに在るものは既に生命の蒸發し去つた文字の連なりである。微妙なる結晶を見るには、硝子板に上ぼせて顯微鏡下に結晶の形象を視なければならぬやうに、文の眞相を觀るには、文字に累はさるゝことなく、直下に

作者の想形を観なければならぬ。文の解釋の第一着手を文の形に求むるといふ時、それは文字の連續の形をいふのではなくして、文字の内に潛在する作者の思想の微妙なる結晶の形象を観取することを意味するのである。」

われわれの圖形において、bcは文字の連續の形である。それの形象とは如何なる意味であらうか。

われわれは、こゝにおいて、われわれの圖形を位置を變じてあらしめよう。bcは文字の連續であつたが、それらの文字は、一つの文中にあるときに、「こゝろ」と「こと」と「ことば」との緊張關係としてそこにあるのであるから、bcにかへるのに、ABCを以てする。さうして、aは生産點であるから、これに代へるのに、ABCの奥にあるA'C'B'を以てする。かゝる圖形を畫くことによつて「形象」の機構をたどりつゝ、理會の機構を明かならしめて行かう。

われわれの第二の圖形において、A'B'C'は、ABCの上に表はれた所の「文の形」なのである。それは、「想の形」を意味するものであつた。（垣内松三教授著「國語の力」一〇一頁參照。以下この書二二頁までの參照頁數は、「國語の力」の頁數を示す。）かくの如く見るときに、想の形としてのA'B'C'は、表現の立場においてはABCに發展するものであり、理會の立場にあつては、ACBからよみとられるべきものである。今、後者を問題として、ABCから、目に見えざる所のA'B'C'が如何にしてよみとられるのであるかと問ふとき、それは「文中の一の手がかりから文を内觀する意識の上に想の形が見えるのであると考へることができる。」と答へられてゐる（一〇二頁參照）。さうして、「文の眞相を見るには、文字の底に内在する「文自體」に面しなければならぬ。」といつてゐる（一〇二頁參照）。文自體に面する方法は、然らば如何にあるのであるか。

そのためには、第一に放心を收斂する工夫を積まねばならぬことをよく經驗するが、それは多くの場合失敗すると
いはれ、「この不快なる經驗の累積の間から、さうした主觀的態度に沈潜することなく、事物的對象に惑亂さるゝことと
なくして、解釋の要求を充すために、文の形をじつと心の面前に置いて、それを研究の對象とする作用を意識しなけ
ればならぬ」のであつて、「大地の底に濫れて居る生氣を僅かに湧き出して來た一分の寄にも見得るやうに、文の内
に編まれて居る生命を見るには、先づ文字を凝視することから始めねばならぬ」といはれてゐる（一〇四頁參照）。

かくの如き、解釋の方法の叙述を通して、われわれは、われわれの問題の解決に近づいてゆかう

「國語の力」においては、内化と表出との關係は「内より外に滲透する表現である」と云ふ（一〇五頁參照）。ＡＢＣ
とA'B'C'との關係は、内より外への滲透として説明されてゐる。かゝる場合ＡＢＣを見つめることによつて、如何に
してA'B'C'が把捉せられるのであらうか。これに答へて「文字の内に潜める想の形を見るには、文字に現はれた文の
形に泥むことを避けると共に、もつと注意深く味讀しなければ錯誤に陷らしむるものである」といつてゐる（一一〇頁
參照）。

この書の一一七頁に「文學的建築は、作品の各系素を、系素と系素との關係に於て見るので、これを全體系として
見る時には、さうした形式的關係の外に、この關係に生命を與へ、意味を示現して居るもつと統一的な作用の作用が
あらはれねばならぬと感ずるのである」といつて居るのは、文學作品をＡＢＣにおいて見るのが文學的建築の考へに
從ふ所の見方であつて、全體系として見る時には、このＡＢＣの面に置かれてゐる系素の關係に生命を與へる所のも
のがある筈だと主張してゐるのである。さうして、ＡＢＣにおける各系素は、意識の焦點であつて「文は瞬時に變化

する意識の連續の焦點を文字に飜譯したものと考へられ、「文の形」はその連續を統一したる焦點の中核より顯現したものと見ることができる。」といふのである（一一九頁參照）。

このことは、ＡＢＣに於ける文學的建築がＡＢＣにおける藝術的攝理によつて統一されると考へ、藝術的攝理は亦文學的建築の形態の上から說明せられると云ふ考へ方を離れて、クローチェの「直觀は表現なり、表現は直觀なり」と云ふのと同じ考へ方であると云ふ。さうして、直觀と表現との關係を疑つて、「もし過つてこゝに一語を否ければ忽ち理に陷るのである」といつてゐる（一二〇頁參照）。しかしながら、かくの如き主張は如何にしてなされるのであるか。ＡＢＣとA′B′C′との合致は如何にして云はれるのであらうか。それについては「純一なる直觀にまで統一されたる感想は、直ちに純一なる表現となり得べきである。何となればこの如き統一的綜合は、個性の深奧に於て自律的に混沌を克服し、精神の混亂を制御して、晴朗最明なる統一に齎らす精神の内面に於ける持續的作用であるが故に、直觀と表現とを精神の内面に於て繼ぐ作用は交互に硬化を融和し、放姿を規律しつゝ、具體的統一の世界に參入して、そこから流れ出づる生命の流動に乘じて、自由なる創造の作用に導く作用の作用であるからである」「文の形」の本質的釋明は、この立場に於てのみ一元的に透入することが出來る。」と答へられてゐる（一二〇頁參照）。これにすぐつゞいて、「かゝる『形象の流動』に於て」とある所から、形象の流動とは、「自由なる創造の作用に導く作用の作用」を意味することを知る。この形象の流動において、直觀と表現とを結ぶ一つの綜合についてのこの考へ方において、われわれの問ひ續けて行くべき問題は、この綜合が、何故にかくの如き持續的作用であることが云へるのであるかと云ふ問題である。しかし、それは今こゝに殘すとして、この「形象の流動」こそが、やがて「形象戰鬪」として說かれるものへの第一

階段であることを忘れてはならない。

かくて、一つの文學作品の解釋は、ＡＢＣからＡ'Ｂ'Ｃ'に發展する一つの作用の研究の上に基礎をもつことになる。作用の作用こそは、形象の流動であつて、この點から、解釋は所與の作品を受動的に外面的に分析することでなくして、一體してその內面的なる創造の作用に參加することであり、又形象の流動に乘じて自由なる再構成的體驗に入ることなのである（一二六頁參照。この點から見れば、理會の可能は、「形象の流動に乘じて自由なる再構成的體驗に入る」ことにあるのである。しかし、形象の流動に乘じることは如何にして可能であるか、再構成的體驗は原體驗に對して如何なる位置にあるのであるか。

このことは、一つは意識の飛翔をとくことによつて、解決せられようとしてゐる。即ち文の本質的なる同時的繼續的全一としての形を見る時に、唯文の中に流動する「飛ぶこと」と「止まること」との交互に連續した意識の飛翔を見る。いろ／＼の思想は言語群の中に溶解していて表はされて居ると共に、それが句讀に到りて立止りて憩うて居る。その交互の連續の間に統一的全體がある。文の內面に動く意識の連續の姿は、文字の形に上ると否とにかゝはらず、記號のうちに連續する飛翔の波形である。もし文の形の表面に泥む時に、倏ち飛翔の姿が見えなくなる。文の內面を飛翔する想の姿を見るには、その飛翔の姿に於て見なければならぬといつてゐる（一二八頁參照）。これは、接續詞や助詞の上に眺められる姿であつた。もしさうであるとすれば、文の內面に飛翔する意識の姿において、「文の形」を見るためには如何にすべきであらうか。この答へこそ二一、解釋の力」において力說されたところのセンテンス・メソッドであつて、文の主眼點を直下に會得することから出發して、「文の形」を觀取して、心の面前に現前せしめるのであ

る」卽ち。「種々の煩瑣なる理論や術語や形式に惑はさるゝことなく、意識の流動に乘じ、これに隨伴する極めて自然な態度に於て『文の形』を捉へることから、解釋作用の第一歩が極めて自由に踏み出されると思ふ。」といはれる（一二九頁參照）。

こゝから「一、解釋の力」を回顧して見ると、センテンス・メソッドの行き方として、一、文意の直觀、二、構想の理解、三、語句の深究、四、内容の理解、五、解釋より創作へ、があげられてゐる。これは、センテンス・メソッドの實例から得られた結果であるが、文からの出發こそが、理會を可能ならしめるといふ主張を注視しなければならない。ＡＢＣから、Ａ′Ｂ′Ｃ′に達する技術は、文からの出發である。さうして、形象の流動に乘ずることである。直觀せられたる假定から出發して各部分の分析作用によりて推理せられたる歸結に達することである。解釋はこの意味に於て二つの終點から成立する。直觀せられたる假定は、文に面して直下に捕捉したる第一の終點である。分析の結果は第二の終點である（八九頁參照）。第一の終點は、作者の書かうと思つたものを、解釋の面前にもたらす作用であり、これは更に解釋作用の發點となつて、文の主眼點をどこまで書き得たかと問ふことから、文と全意との關係において、言語の定着性を明かにすることによつて、第二の終點に達するのである。雋敏なる讀む力には、第一の終點と第二の終點とを同一にあらしめることが出來るといふ（九〇頁參照）。

かくして「『文の形』を見る力は、解釋の作用の總體である」とも云ひうるのであつて、「解釋の第一着手は、自己を主觀を雜へざる純眞なる自然の態度に置くこと」である（一三九頁參照）。

かくの如く見てくるときに、形象理論は、こゝにその形をもち、解釋は可能であることが主張され、その方法が提

示せられてゐると云へると思ふ。しかしながら、うちに含まれた幾つもの問題が、展開の可能性をもちつゝ横はつてゐることを見逃してはならない。その中の重要なる一つは「形象の流動に乘ずる」ことの可能性に關する問題である。云ひかへれば、センテンス・メソッドの得るところのものは、果して何であるかの問題である。

二 問題の究明

1

われ／＼は「問題の提示」において、形象理論を通して國語教育科學の基本的なる問題を展開せしめてきた。基本的なる問題の在り方は、われ／＼の前に明示せられることが出來た。われ／＼は更に、形象理論の展開をたどつて、この問題の究明に向はうと思ふ。われ／＼は、この問題に對して重要なる位置を占める論文を、詳細に考察して、思索のあとを正しく辿る必要がある。しかし、そのことは、一部分、研究者への課題として殘されなければならない。われ／＼は、問題の最後的究明への一段階として、この書の終りにそれらの文獻を列擧しよう。

2

「國語の力」において提示せられた最後的問題は、「形象の流動に乘ずる」と云ふことであつた。かゝる問題が提示されてから、われ／＼が前に示した如き文獻の中に、或は更に大學の講義の中に、形象理論は展開せられてきたのである。卷末の該文獻は、それらの思索の飛躍なき段階であつて、眞に形象理論に沿うて進まうとするとき、われ／＼はそこから離れることが出來ない。しかし、今やわれ／＼は、問題の究明から問題の解答に移つてゆくために、餘裕

ある試論をゆるされて居ないのである。故に、幾多の興味多き研究對象であるこの領域を越えて進まなければならない。さうすることは、われ〱の意圖であるところの「國語の力」と「形象と理會」との結合を、ゆるされたる範圍に於て一線の上にあり能はしめる唯一の道であるからである。

「形象の流動に乘ずる」と云ふことから導かれる問題は、形象の流動の位置に關するそれである。卽ちそれは、形象と理會との關係の問題である。形象と理會との關係の問題は、その中心課題として「解釋の可能性」の問題をもつてゐる。故に、形象と理會との關係は、解釋の可能性の問題として論ぜられなければならない。こゝに、われ〱は、形象理論において、「解釋の可能」の問題が、如何に思索されて居るかを問うて見よう。

この問ひに對するために、われ〱は「文學理論の研究」(垣内松三教授著)を考察しなければならない。そこにおいては、解釋の複數と一つの解釋とが問題にせられることから、中心的なる問題に入つてゐる。卽ち、表現の統一性と再現の多樣性との問ひから、表現と再現とにおける同一性の問題に考察を進めてゐるのである。このことは、解釋學の建設に向ふときに、或は文學研究の理論をもつときに、必然的にあらはれる問題と云ふことが出來る。このことに就いては次の如く云はれてゐる。「『表現』と『再現』との同一性は、その兩者に於ける契機を明白に把握することに依りて、その流通の一路を求めるところに成立するのである。卽ち『表現』の契機は、その根柢には個人的特性を含んで居る。從つて主觀的である。その主觀的なる『再現』の契機が、客觀的なる『表現』の契機を透視し得る地點に立つためには、先づその『主觀的なるもの』をして『客觀的なるもの』に近づかしめるところの、『生の交渉』が顧みられなければならぬ。」といふのである。(垣内松三教授著「文學理論の研究」一二頁參照。以下この書の二六頁までの參照頁數は、「文學理論の研究」の頁數を示す。)

併しながら、生の交渉の顧慮は、如何にして解釋の可能に導かれるのであらうか。こゝに理會の技術が提示せられる。それは、看取・知解・說明の作用の具體的統一としての理會の形成である（十八頁參照）。こゝにあげられた三つの作用は、「再現」の成立に於てその一つをも缺くことの出來ない具體的聯關であつて、個性に內在する所の、かくの如き具體的聯關こそが、表現と再現との同一性に關する疑惑を解くのみならず、感性的に與へられた表現を透して普遍妥當的なる客觀的理會にまで自己を齎らす可能性なのであるとかれてゐる。かくして、解釋と云ふことは「追體驗的なる再現を凝視することに依つて、更に生命聯關の中に於ける實存的表明として、意義する記號を理會する作用である」と考へられる（一九頁參照）。故に「文學作品の表現は再現の中に生々と生ひ立ち、その無限の進展を續けるのである」（二〇頁參照）。

かくの如き理論的根據から、次の如き文學機構の分析がなされた。卽ち、文學機構において、（一）延長・（二）層・（三）緊張・（四）力が示されたと同時に、集積・原集積・原現象が示された。さうして、原現象において、基本密度（創造的精神）基本方向（創造的個性）基本操作（創造的形式）が說明せられてゐる。

こゝに層序の概念が提唱せられてゐるのは重視せられなければならない。

原現象・原集積・集積の全面を貫くところのものは、こゝでは、空間性と時間性として抽出せられてゐる（三一頁參照）さうして、文學機構の機構的作用は、空時性或は時空性として統一される。さうして、この統一をあり能はしめるものは「結晶の力」である。この力は、精神的行爲の內に潜在するものであり、從つて精神的・機械學的・動力學的なるものである。「われ／＼」はそれを唯行動に依つて純粹經驗的に對照することに依つてのみ明證し得る。（三二頁參

照）かくの如き綜合をなしうる内的調和は超自然であり、それは、行（熟讀）に依つて、追體驗によつて、とりあげられるものであるとされてゐる。さうして、この力は、學的に統一すれば、創造的精神と創造的個性と創造的形式との聯關する文學形象作用として綜合することが出來、その中軸をなすものは、「連續する力」としての時間であるとのべられてゐる。

こゝに殘された問題は、行（熟讀）による追體驗の可能の究明である。即ち「なほ殘されて居る問題は純粹志向的對象性に於て固有なる二重機構に關することである。それは文學作品の理會の結果は、心理的存在であるか又は實在的であるかと云ふことである」（三九頁參照）。こゝでは、尚、表現と再現とは對立してゐるのである。同一性についての問題は、依然として殘されて居る。

3

「他人の理會は如何にして可能であるか」の問題は、しばしば問はれてきた問題であるが、この場合に、常に假定せられたことは、人間性一般の存在であつた。（人間性一般の存在は證明せられることが出來ないと云ふことから、この考へ方は、樣々に發展せしめられたのであるが。）「實踐解釋學考」（垣内松三教授著）においては、「個性の相異は質的ではなく量的である。」とのべられてゐるが、このことの根柢には、人間性に一般を假定したディルタイの考へ方と同じ方向のものがある如く思はれる。（垣内松三教授著「實踐解釋學考」一四頁參照。以下この書の三四頁までの參照頁數は、「實踐解釋學考」の頁數を示す。）故に、形象理論は、その展開において、理會の客觀性の問題に達して、ライヒナー・シュラー等の思索が考慮せられるやうになつて行つたと見ることが出來よう。

同書に、「内的なる生が自己」を表現に於て外化し、外化せる生が理會によりて再び内化される。……理會は生の自己認識である。」とあるが、こゝに殘された問題は、外化せる生が理會によつて、再び内化させる際の客觀性の問題である。（一四頁――一五頁參照）。

此處に、この問題の解決の一段階として、「通知」なる概念がとり出される。「通知」とは「その場に表現されてゐる體驗だけでなくて、その全聯關の内部に現在するものとしての體驗が表現されてゐる」と云ふ意味であり、それは「精神的姿態」とよばれるものである（三四頁參照）。……さうして、この「精神的姿態」は、理會的解釋（解釋を三つに分けて、叙述的機構型・表現的機構型・象徵的機構型としてゐる）であるところの自證の中に顯現する。さうしてはじめて、この表現の理會の客觀性が達せられるといはれてゐる。しかし、こゝには問題が殘されてゐる。即ち、この書自らの語の如く、「表現せられたる體驗が、その意味に於て、單なる個々の體驗としてゞなく全體に於ける體驗として、その全意義をもてる全體の生の聯關として通知せられる限りは、こゝに要求された精神科學的な客觀的理會は「生の意義は如何にその客觀化たる表現の中に通知せられてゐるか」を概念的に把捉することの可能性によつて制約されてゐる」（三五頁參照）。かゝる概念形成（一つの判斷）は、如何にして客觀性を確保しつゝ充足されるであらうか。これに對する形象理論の答へは次の如くである。即ち「それは表現の中に通知せられてゐるものと志向的に關係づけられて居り、……この表現が實現されるに到つたその時の體驗を顧慮することによつて形成される。即ちそれは文學機構に於ける「原現象」といはれるものゝ考量によつて成就されるであらう」（三六頁參照）。しかし、それは如何にしてであらうか。

かゝる體驗への顧慮は如何にして客觀性をもちうるのであるか。

形象理論においては、このことの可能性を期待してゐる。「個人的なる體驗が、同時に客觀的な普遍妥當的なものである如き場合が期待される」のである（五九頁參照）。「こゝにディルタイが、「如何にして個々人は自己に感性的に與へられたる他人の生の外化を普遍妥當的な客觀的な理會に齎しうるか」といふ彼の解釋學の前提的設問をば、かのカントの「如何にして先天的綜合判斷は可能なりや」の課題に擬した理由がある」（五九頁―六〇頁參照）。

かくの如くのべた後、かゝる再現に達する行き方として次の三つが示された。即ち、第一は表現する事物との直接の交渉、つまり「體驗」によつて、第二は他の人々からの「教示」によつて、第三はわれ／＼自身の「先天的なる工夫」によつて（六七頁參照）。ひとは心を虚しくして、その作品と正しき關係を保ちつゝ進まなければならない（七〇頁參照）。われ／＼を不確實なる境地から救ふものは、自證に比せられる所の「まこと」ではあるまいかとのべられてゐる（八一頁―八二頁參照）。

三　問題の解答

1

たしかに國語教育の根本問題の解明は、「理會を對象とする立場、即ち解釋學的立場に至ることなくして」（一〇〇頁參照）はなし果されない。さうして、こゝには、「言ひ古された、だが依然として充分判明してゐる樣にも思へない『追體驗的理解』がある」のである（一〇三頁參照）。理會の客觀性の問題は、形象理論においては如何に解決せられてゐるのであらうか。

「實踐解釋學者」においては、ハンス・ライヒナーの「理會の心理學」の吟味を通して考察が進められてゐる。ハンス・ライヒナーは理會を二つに分けて、再認的理會と眞實の理會とする。再認的理會においては、第一に熟知性があげられる。さうして、次に、再認的に理會されたものの「體驗可能の意識」があげられる。「體驗せられた『熟知』の印象の如く、「體驗可能の感情」も亦、たゞ一種の非直觀的な意識態に於てのみ與へられるものであらう」（一〇八頁參照）。「體驗可能の感情」は、感情移入の作用を暗示する。こゝに眞實の理會がある。眞實の理會においては「體驗可能性」と「現實的共體驗」との關係が問題とされる。この關係は次の如くのべられて居る。即ち、「われ〳〵は自己をば、行動しつゝある人格の中に轉置し、或は逆に、その人格がわれ〳〵自身の意識の中に、その地位を獲得して、その結果われ〳〵はそれによつて魅入せられ、他人の中なる自我をその獨自の重要性に從つて支配し得んがために、われ〳〵自らの自我の中心からの、潜在的な體驗の仕方の資料に自由なる形象構成へと向ふ感情と緊張との全事態を貸し與へるのである」（一〇九頁參照）。この「貸し與へる」と云ふことは「一緒に語る」と云ふことであつて、このことがテキストへの集中を増大すると共に、作家の志向した事態を生じないやうなすべてのものを排除し、かゝる選擇過程に、われ〳〵の自我の現實的な素質的な事態が從屬する。そして、われ〳〵は次第に完全なる從屬といふ事態の中に入りこむ（一〇九頁參照。ライヒナーは、われ〳〵の意識の中への、他人の人格のこの樣な浸透の全過程を「他律的修飾」とよんだ。

こゝに生ずる問題は、「他人の」と「自己の」との狀態の同一性の問題である。ジムメルは「史的個性を理會するために内容は全く個人的であり得る」（一一二頁參照）と云ひ、フッセルは「相互の了解は通知する方と了解する方との兩

方の側にある相關關係をふくむ心的作用を要求する。だが何ら全き同等性ではない」（一一三頁——一一四頁參照）といつてゐる。さうしてこゝでは「もとのものである他人の體驗と、讀者としてのわれ〳〵の感情移入的意識の内容との間の關係の緊密さ及び正確さの度合が、心理的に問はれてゐる」（一一一頁參照）。ライヒナーは、物語の文字の體驗は、(1)可能な特有な個々の體驗、(2)想像の體驗から總括されるが、(3)の想像の體驗は、「他人の」事態とは殆ど同化されないといつてゐる。

かくして、マックス・シェラーの說が引用されてゐる。シェラーによれば、自身の體驗と追體驗との間には、先づ何らの差違も存在しないのである。「體驗の未分なる流が、先づ第一に」そこに流れ、自己のものと他人のものとは、分れずに相互に混合してゐる。そしてこの流れの中で始めて、固定的に形成された渦卷が次第々々に作られ、それがずつと長く流れの新たな要素をその圏内に引き込み、この過程の中で別々の個人が整序されるのである。」（一一二頁參照）。と云ふ彼の「現象學と同情感及び愛と憎の說」の一節が引用されてゐる。更に、シェラーの說として、「讀まれたものゝ理會と、内的な追談話とは相互に密接に結合してゐるので、舌を固定して動かさないでゐると、讀まれた新聞の了解は著しく低下するほどである。斯うした事實は、われ〳〵自身へと向けられた内的な直觀は直接でなく、却つてたゞ身體の事態への體驗の作用を媒介として一つの體驗を生の全體の流れから浮き立たせるのであると云ふことを示してゐる。それ故結局に於て自己と他人の知覺との間に何らの原理的差別は存しない。身體的事態が、修飾され、知覺する自我の事態が、表現の何らかの仕方の中に移される限りでさういふものになつて來るのである。」と引かれてゐる。（一一三頁——一一四頁參照）。

こゝに、理會は可能になつたのであるが、理會の明證の問題が殘されてゐる。「かくて理會の明證は個々の體驗が內部知覺の聯關の中に現はれる度合に從つて增加する。しかしそのものとしては、この明證はそれに依存しない。旣に全く非直觀的な『體驗の可能の感情』が、讀者にとつて、正しく理會せんとする義務的意識を生ずるのであるが、それは、他人の心的なる事態とその動力との、制約せられない「內的論理」を、如何なる瞬間にも疑はないものである。われ／＼は以前からこの內的論理をば事象論理なる語によつて示して來た」（一一五頁參照）。この內的論理の客觀性に關して、ハンス・ライヒナーは、「自我適合性の意識」をもつてくる。この意識は、普遍必然の範疇と、個人的な範疇との全く獨特なる結合をいみするのである（一一六頁參照）。

「他人の」及び「自己の」體驗の間には、新たな人格的な統一が形造られ、その聯關に於て個々の作用は一つの滲透的な「自我聯關」を追求し、個々の體驗の如く、その自我からの分節は決して固定的なものでなく、私に持續的な外的な自我が押付けられ、これが私のものとして經驗され、又逆にそこから他人の人格の自我狀態が私に想像されるといつてゐる（一一七頁參照）。さうして、眞實の理會たるものゝ全作用は、局外性と受動性との兩極性をその特徵とするとのべてゐる。「理會が、理會されたものを、理會に固有する」（ハイデッガー）ことを以て、解釋に於ける理會の眞相と見んとするものである」といつてゐる

2

以上において、理會の作用は理會者の側から考察されてきたのである。さうして、「理會の可能」の問題は、主としてライヒナー・シェラーの思索を通して論ぜられたのである。そこに於ては、この科學史が問題としてもつてゐたもの

に、全的にふれて居る様々なる思索の後に、吾々の問題としての理會の客觀性について、「自我適合性」を導く。自我適合性は、普遍必然の範疇と個人的な範疇との全く獨特な結合を意味してゐるのであるが、そこには飛躍せられた部分がある、即ちそれは、共體驗において「自己の」と「他人の」との體驗が如何に整序せられて來るかの思索過程である。これに就いては、局外的性質なき體驗と局外的性質をもてる體驗との關係を、局外性と受動性とに整序して、眞實なる理會の特徴は、この兩極性であるとしてゐるのである。

かくて、理會作用を、理會の對象的側面から明かにせんとする試みが進められ、こゝに、「理會の定位」の問題があらはれた。この「言語學的理會」の定位について語るために、言語科學的意義學の成果が問はれてゐる、「ポルチッヒ、アマン、ワイスゲルベルの三者を中心とする言語科學的意義學の最近の努力は、一切の心理的事態より獨立した意義の領域を、客觀的に見出さんとするところに向つてゐたのであつた。……言語内容をそれ自身として研究することが、意義學の考察の範圍でないとすれば、われ〳〵は依然として「記號は必ず意義への記號であり、意義は必ず記號の意義である』との提言に從つて、記號と内容との上位に眞の意味の「言語」があるといふ記號の構造說をとるべきであらう」(一四二頁――一四三頁參照)。といつて、ノレーンに於ける言語形式の概念、シュタインタールに於ける内面言語形式の概念が顧慮されてゐる。

こゝに一つの注意すべき展開が來るのであつて、それは「象徴形式」への思索である。このことが、「解釋」の考への次に書かれてあることは、恐らく、垣内教授の思索過程に對應するものであらう。長い間、形象理論の一大展開期を眼前に見つゝ、そのあとを辿つて生活せる筆者の熟知せる點よりするも、そのことが云はれると思ふのである。

一周知の如くこの概念はウイルヘルム・フォン・フンボルトに起原する。ヴントはそれを彼の心理學の立場より取り上げて、「内面言語形式は心理的特徴及び關係の總計で……それは一定の外面形式をその作用として齎すものである」と見たが、更にカッシラーが、これを「象徴形式」として考察を進めて來たことは特に注意を要することと考へるといはれてゐる（一四四頁參照）。

われ／＼の問題は、こゝに象徴形式が近づかれることになった。象徴形式は文學形象と最も近き位置において見せられるであらう。

この問題に突入するために、序説的なる意味から、ヘーニヒスヴァルトの學説が顧慮されてゐる。彼の意義の機能方向は、相互に歸屬する所の三項に統一出來るとされ、「第一は自我それ自身の側に從つてゞある。意識の多樣性を超えて把捉せられた自我の統一と集積とは、意義の規定されてゐるといふことを表してゐるものである。意義なる概念の第二の機能的方向からして、「意味」をば知識論的に獨立の力として、そのものとして對象的に評價することの出來る思想内容として、把へる可能性が生ずる。意義の第三の機能方向は、知られたるもの、知られるもの、即ち意味の、言語眞理への關係にかゝはることとまとめられてゐる（一四七頁參照）。ヘーニヒスヴルトは、意義をば「すべての意味の言語への傾向」として示したといはれる。

意義をかくの如く解して、こゝに、言語學的に言語の意義を理會せんとする解釋の要求を再思してゐる。

このことに入るために、意義と表現とが問題とされ、「言表——意味」といふ一つの統一への組成が重要視せられる。これは、所與としての言語を、人間の全生活活動の中に編入して認識することに關してゐる問題であるから、言語

的表現一般の理論として研究されなければならないとし、リチャーズ氏の言語的行爲の四方面に關する學説が述べられる。それを中心として、偏向の諸方面が分析されてゐる。その後に、次の重要なる進行がなされてゐる。「これ等の偏向を克服して理會の中道を求むるためには、言表と意味との統一の根柢なる緊張の中に結晶の力を認めて、表現運動に於けるかうした諸力の合一に着目しなければならぬ。何となれば、その諸力の相互關係によりて經驗的なる表現面は決定せられて來るからである。從つてこの定位に立つ理會には、それ等の諸力を一を主として他を無視し、又はその一つ一つを分離してとらへ、或はそれ等の相互の關係を究めることなくして直ちに内質の問題に突入することは許されない。然るに『意義』『表現』の連續を離してその一面に偏執するために「無」或は「零位に陷り、再び理會の大道に乘ずることのできない危險に遭遇するのである。その兩極を連續して、幾層かの表現層を透視し、意味と言表との統一を確保せしむるには、更に意義の中軸を確保してその動力學的根源に[illegible]るのでなければならぬ。「無」或は『零位』に於て、いかにして理會の定位を占めるかといふことは、相當に困難な、しかし興味ある問題である」（一五八頁――一五九頁參照）。

かくして理會の技術としての解釋が、一つの方法として明示せられるのである。

さうして、理會の立場は、形象構成作用を透して創造的個性の原現象に穿入する態度においてである。卽ち、理會の立場は當然象徵的定位に立つとのべられる。更に「ことば」を離れることの危險が主張され、「ことば」の力を求めることによつてのみ、無を突破することが出來るといふ。こゝにおいて、無は有を含める無であるとされてゐる。「從つて叙述面は象徵的形式として一言一字といへども、一切は『有』を含める『無』の影として把捉されなければなら

ぬ」とされてゐる（一六六頁參照）。この無こそ、それが生々した作用であるところに於て、その潜在的なると動力的なるとを問はず、一である。われ〳〵が「ことばのリー」といふものはそれであるといひ、この無を突破する試論としての三つの着眼點が示された。一は基本操作であり、二は基本數秩序であり、三は基本密度であつた。

[illegible]

最後にわれ〳〵は、理會の可能性に關するマックス・シェラーの考へ方と、同じくこの問題に關しての類型の考へ方とが、如何に統一されてゐるのかを見なければならない。

シェラーの考へによれば、結局において自己と他人の知覺との間には何らの原理的差別は存しないのであつて、この點から、理會の可能が云ひうるのである。このことに對して、類型は如何なる位置にあるのであらうか。

「類型の價値は、その助けを藉りて、個人的な心的生活が理會される可能性を規定するにある。」とのべられてゐる如く、それは「心的生活の巨大な複雜性と多樣性とを種々なる側面から推測すべき門戸を造るものであるに過ぎない」のである。さうして、もし類型が固定的なものであつて、各人が完全に純粹な典型を以て現はれるのであるとしたら、他人の理會は不可能である。こゝに類型の概念に本質的な「融合性」が想起されるのである。

かゝる融合性を考へることは、個性の差違を質的なるものにみとめることから去つて、それを量的なる差違にみとめる考へ方に行かねばならぬ。故に、こゝには、次の如き統一を見るのである。即ち「われ〳〵は質的意味統一としての類型の背後に、諸要素の量的差違を認めねばならぬ」といはれてゐる。こゝに、ディルタイの思想と共通な、さうして、シェラーの考へ方に近き方向を見得るのであつて、理會の可能性に對する類型の問題は解決せられるのである。

かくして、一つの假設的解釋としての直觀から、その假設を判斷する作用としての自證、更に自證を客觀化して明證せんとする證自證への秩序による解釋の方法が確立せられるのである。このことは「國語教授の批判と內省」以後の諸文獻を回顧する必要を想起せしめるのであるが、それと同時に、國語教育科學についての秩序ある叙述としての「形象と理會」に結びついてゐる一線を強く思はせるものである。

「形象と理會」は、われ〳〵が考察してきた問題を內にふくんで、それを根柢として、そこに國語教育の精神と國語教育の方法とを秩序づけた著述であつて、「國語の力」公刊の後、實に約十一年目にあらはれたものであつた。今、われ〳〵の考察に特に關係深き前編をとり上げて見れば、次の如き秩序があたへられてゐるのである。

以上において、われ〳〵は、國語教育科學史上の問題の提示よりその問題の解答に到つて、われ〳〵の試みを果し

たのである。しかしながら、それを通じてわれ〳〵の問題を展開して來た形象理論は多く歪曲せられて居るであらう。われ〳〵は更に新しく研究の途に上ることによつて、この失敗を補正しよう。その折に、形象理論の主流に浮んで、國語教育のために努力した多くの研究を考察しよう。

本稿の進行の中途において、「文學表現の研究」が公にされた。この書においては、表現の問題が、微細なる思索の中にとりあげられてゐる。筆者の考へるところによれば、「形象と理會」が時間的には早く公にされたのであるけれども、「形象と理會」の公刊よりもむしろ早く、「文學表現」の研究はなし果されてあつたと想像される理由がある。(一九三三)

三　參考文獻

その一

何れも垣內松三教授の御著述である――(※の記號あるものは單行本)

國語讀本文意の研究(上方義道氏との共著)　大正十四年十月

內路(東京高等師範學校校友會誌)　同　同十一月

※國語讀本讀方教授の理論と實際(齋藤榮治氏との共著)　大正十五年二月

日本文學體系(國文教育)　同　同十一月

※國語教授の批判と內省　昭和二年八月

精神科學としての文學史(國文教育　昭和二年十一月

相關者(國文教育、文學形象の研究號)　昭和三年五月

形式・形態・形象(國文教育)　同　同同同

形象の概念(國文教育)　同　同六月

※讀方教育の現象學的研究(中島德三郎氏との共著)　昭和四年六月

※國文學書目集覧（前編、國文學の方法體系）（毛利昌氏との共著）　昭和五年五月
解釋學展望（國文學誌）　昭和六年五月
文學史に於ける時代層（國文學誌）　昭和六年六月
文學思潮の客觀性（國文學誌）　同　七月
日本文學研究法（岩波講座日本文學）　同　同
文學史を貫くもの（國文學誌）　同　八月
文學群像論（國文學誌）　同　十一月
解釋の兩極的關係（國文學誌）　同　十二月
象徴的機構（一）（國文學誌）　昭和七年一月
「冬の日」（國文學誌）　同　同　同
國語の學力の等差——象徴的機構（二）（國文學誌）
　同　二月
三角室茶話（國文學誌）　同　同　同
思念想寂（丘）　同　四月
讀方指導の展開層——象徴的機構（三）（國文學誌）
　同　同　同

※文學理論の研究（國文學誌）　昭和七年五月
——文學理論の研究・様式史の問題・
様式の本質・形象理論と國語教育——
解釋學片影（一）（國文學誌）　同　六月
讀方指導の螺旋的向上（國文學誌）　同　同
解釋學片影（二）（國文學誌）　同　七月
讀方指導の螺旋的向上（國文學誌）　同　同
文學理論と實地授業とは共に進展する（丘）　同　八月
※實踐解釋學考（上）（國文學誌）　同　同
※實踐解釋學考（下）（國文學誌）　同　九月
解釋學片影（國文學誌）　同　十月
觀相聽寫（國文學誌）　同　同
國語教育と精神科學（丘）　同　十一月
文學新生の研究（國文學誌）　同　同
解釋學片影（四）（國文學誌）　同　十二月
國語教育の動向（國文學誌）　同　同
國語教育と精神科學（中）（丘）　昭和八年一月

丘より(國文學誌)　昭和八年一月　讀方教育講座(コトバ)　昭和八年四月
國心と國語(國文學誌)　同　同　同　※小學國語讀本卷一 形象と理會　同　同　同
形象と理會(讀方教育講座)　同　同　同　文學表現の研究(コトバ)　同　同　五月
國語教育の實驗的研究(上)(國文學誌)　同　同　二月　國語教育と類型の問題(コトバ)　同　六月
國語教育の實驗的研究(下)(國文學誌)　同　同　三月　讀方教育講座(コトバ)　同　同　同
國語教育と類型の問題(コトバ)　同　同　四月

その二

刊行年月順に整理した。括弧の中の文字は、書籍の所在を示してゐる。發行月の不明なるものは、その年の最初に置いた。研究史的に不必要と思はれるもので省いたものもある。

(上)……帝國圖書館所藏
(日)……日比谷圖書館所藏
(馬)……馬淵冷佑氏所藏
(丸)……丸山林平氏著「國語教育學」所載のものによつて補充せるもの
(附)……東京高等師範學校附屬中學所藏

明治二十五年
今泉砧善著　讀書作文教授法(丸)
明治二十九年
臺灣總督府民政局學務部編

臺灣適用小學讀方作文掛圖教授指針(日)　金港堂書籍株式會社(馬)

同　三十一年

小山忠雄著　讀書作文教授法(丸)

同　三十二年

猪狩亥三郎　實驗作文教授法(丸)

同　年

谷本富著　小學各科教授法講義　六盟館(馬)

明治三十三年

有馬驍　國語科綴方教授法(丸)

同　年

澤柳政太郎著　讀書法　第七版　寶永館(馬)

同　三十四年

下平末藏著　國語教授法(丸)

山中房吉等著　國語科教授法(丸)

兒崎槌著　國語科教授法講義(丸)

阿部東作著　國語教授法草案(丸)

伊藤裕著　小學校國語科教授論　育成會　發行所　博信堂(日)

保科孝一著　國語教授法指針　寶永館書店(日・馬)

同　三十五年

小泉秀之助著　國語教育發音言語及假名遣　(丸)

同　三十五年

佐々木吉三郎著　國語教授提要　育成社(日)

同　三十六年

富永岩太郎
相島龜三郎著　國語科各方面關係及讀方教授法　同文館(日)

同　三十七年

大橋銅造著　國語科教授法(丸)

富永岩太郎著　國語教授法(丸)

同　三十八年

豐田八十代著　國語教授指南(丸)

森岡常藏著　各科教授講義　同文館(馬)

明治三十九年

豐田八十代著　國語教授法(丸)

及川平治著　教授法研究如何に國語を教ふ可きか

佐々木吉三郎著　國語教授法集成　上卷
育成會出版部（日）—下卷四十・五、—
内山幻堂（正如）著　實用普通作文寶鑑　博文館（附中）
同　四十年
佐々木吉三郎著　國語教授法集成　下卷
育成會（附中）—上卷、三九、九—
同　四十二年
谷垣勝藏著　系統的綴方教授法　隆文館（馬）
藤井廣逸・久芳龍藏・内藤岩雄・新國寅彦著　綴方教授法精義　弘道館（日）（上）
倉田八十八　綴り方教授法　發行所不明（上）
明治四十二年
友田宜剛著　普通教育に於ける作文教授の理論と實際（上）（附中）
武島羽衣（又次郎）著　國語解釋法　文昌閣（馬）
同　四十三年
普通教育研究會　尋常小學國語教授細案（丸）
島田民治著　國語科教授要義（丸）

遠藤國次郎著　國語教授同案（丸）
國定教科書共同販賣所　尋常小學讀本教授書（丸）
同　尋常小學綴方教授書（丸）
豐田八十代著　國定新讀本の研究　前編
學海指針社（日）—下卷、四三、一〇—
鹿島清治・木村仁止著　讀方教授の理論及實際　育成會（日）
松岡保著　國定讀本唱歌の研究　廣文堂（日）
明治四十三年
豐田八十代著　國定新讀本の研究　後編
學海指針社（馬）—前編、四三、二—
友田宜剛著　國定讀本の新研究　綴方教授法
目黒書店（日）（上）
廣島縣師範學校著　國定讀本の淵源
發行所不明（日　實物ナシ）
明治四十四年
小山左文二著　新定讀本教授資料　卷一　松邑三松堂
中西準太郎編　國定新讀本事物詳解
發行所不明（日—實物ナシ）

藤井利譽・宇田四郎著　尋常小學語法教授細案　東京寶文館(日)
岡山縣師範學校附屬小學校內研究會編纂(代表者・田中廣吉)　新讀本に現れたる漢字教授指針(日)
馬淵冷佑著　尋常小學讀本參考　寶文館(馬)
明治四十四年
伊澤修二著　國定小學讀本正讀法　樂石社(馬)
同　四十五年
橋本文壽著　新國定讀本教授適用實際的口語法　明誠館書房(日)
豐田八十代等著　讀方教授の研究　廣文堂(上)
同　實驗綴方新教授法　廣文堂書房(上)
芦田惠之助著　尋常小學綴り方教科書教授の實際　寶文館(上)
後藤薫・小山保雄・小松久夫著　國定教科書に見えたる泰西教材の研究　明誠館書房(上)(日)
五十嵐力著　國語讀本文章の研究　二松堂書店(上)(馬)
沼波武夫著　教員諸氏の爲に(國定教科書中俳句の解釋・俳句解釋法)　俳味社(日)(馬)

大正元年
馬淵冷佑著　高等小學讀本參考　弘道館(馬)
大正元年
澤正・清水恒太郎著　綴り方教授の理論及實際　良明堂書房(上)
松本貐太郎著　分解・綜合・教案式書翰文教本　興風社(日)
同　二年
北澤信等　國定讀本國民的教材教授資料(丸)
酒井不二雄同　讀文の模寫的詳解(丸)
芦田惠之助著　尋常小學綴り方參考書(丸
市川源三著　實驗的綜合的批判的國語教授法大成　尚文館(日)
友田宜剛著　小學校に於ける文法と綴方との解決(丸)
第一回全國訓導協議會會員提出問題　(假綴)　(馬)
芦田惠之助著　綴方教授　目黒書店發賣・愛藝館出版部發行(日)
大正二年
河崎松一著　新綴方要義　鳥取市山本尚文館(上)

市川源三・丸山庄司著　國定讀本韻文教授の新研究　教文館(日)

大正三年

遠藤早泉著　國語中心成績考査の新研究(丸)

有信新六著　國語讀本韻文の新解說(丸)

森本常吉著　應用漢字の研究(丸)

尾島平治郎著　系統的書翰文教授法(丸)

久芳龍蔵著　綴方教授の新研究　弘道館(上)

山口德三郎・秋田喜三郎著　讀方教授の新研究　以文館(上)(日)

佐藤秀之助著　尋常讀本漢字語句詳解　廣文堂書店

友納友次郎著　實際的研究になれる讀方綴方の新主張　目黑書店(上)(日)(馬)

加勢藏太郎編　形式的取扱を主としたる國定讀本文章講話　目黑書店(上)(附中)

高成田忠風著　國定讀本韻文詳解及取扱方　目黑書店(日)

保科孝一著　國語教育及教授の新潮　弘道館(日)

久芳龍蔵・花田甚五郎著　精說讀み方教授　弘道館(馬)

大正四年

友納友次郎著　讀方教授法要義　目黑書店(日)(馬)(上)

平野秀吉著　綴り方教授の根本的研究　六合館(日)(上)

芦田惠之助著　綴り方教授に關する教師の修養　育英書院

保科孝一著　最近綴り方教授の新潮　同文館(日)

淺山尚著　綴方教授の破壞と建設　隆文館(上)

大正五年

大川重吉著　國語教授の根柢(丸)

駒村德壽著　文章教授上の新研究(丸)

平松折治著　書取教授の建設(丸)

保科孝一著　國語教授法精義　育英書院(馬)

芦田惠之助著　讀方教授二版　育英書院(日)(馬)(上)

豐田八十代著　國語教授法概說　育英書院(日)

稻垣國三郎著　最近研究綴り方教授の新建設　寶文館(上)

田中廣吉著　言語及讀方の基本的研究　目黑書店(上)

水田光著　お話の研究　大日本圖書株式會社(上)

齋藤胖著　實驗書方教授法　日進堂(上)

花田甚五郎著　新潮を汲める綴方教授の實際　教育新潮研究會(日)
(教育新潮叢書第　期第九卷)

黒沼勇太郎著　綴方教授の根柢　弘道館（上）

駒村徳壽・五味義武著　寫生を主としたる綴方新教授法の原理　目黒書店（上）

須甲理比等著　本質の上に立てる最新綴方教授　金港堂（上）

高田師範學校附屬小學校著　綴方教授の實際的研究（上）

大正六年

下位春吉著　お噺の仕方　同文館（丸）

飯田恒著　教案中心綴り方教授の實際案　教育研究會（日）

赤阪清七著　趣味中心啓發主義國語教授講話（日）

水田光著　お話の實際　大日本圖書株式會社（上）

自動教育研究會　自動主義綴り方教授の革新（自動主義教育實際叢書六編）（上）

自動教育研究會著　自動主義讀方教授の革新（自動主義教育實際叢書第七編）（上）

大正七年

水谷久吉著　國語教授の新潮（丸）

高橋喜藤治著　國語讀本教授要義（丸）

小學教育研究會著　綴方教授の新研究（小學校教育實際叢書第二輯第五卷）小學教育研究會發行目黒書店賣（日）（上）

三浦嘉雄・橋本留喜著　教材精説、實際教法、尋常小學國語讀本教授書寶文館（上）

小學教育研究會編　國定新國語讀本研究及活用　小學教育研究會（日）

氏家壯治郎著　兒童の文章力に基ける綴方指導の實際　廣文堂書店（日）（上）

後藤朝太郎著　文字の教へ方　二松堂書店（日）

高橋喜藤治著　尋常小學國語讀本教授要義　尚文館（上）

友納友次郎著　綴方教授の原理及實際　目黒書店（上）

齋藤島太郎著　國語讀本の研究　高知國語教育研究會（上）

生田五郎等著　尋常小學國語讀本解説及教材取扱の研究　廣文堂（上）

友納友次郎・田上新吉著　尋常小學國語讀本教授詳案　目黒書店（上）

杉上長造・岡田重次郎著　尋常小學國語書方新教授書　明治出版協會（上）

芦田惠之助著　尋常小學綴り方教授書卷一―四　育英書院（上）

春日政治著　尋常小學國語讀本の語法研究　修文館（上）

飯田恒治著　話し方教授　教育研究會發行（上）

大正八年

重野辰之著　國語讀本の説明（丸）

八波則吉著　尋常小學國語讀本要義　教育研究會（上）（馬）

花田甚五郎著　編纂趣意書の解説を中心とした新讀本講話　目黒書店（上）（日）

友納友次郎著　尋常小學話方教授書二冊　目黒書店(上)

友納友次郎著　綴方教授の思潮と批判　目黒書店(上)

鹿島清評著　新定國語讀本準據讀方教授法　同文館(上)

秋田喜三郎著　創作的讀方教授　明治出版社(上)

大正九年

柳澤政太郎著　尋常小學國語讀本の批評　同文館(上)

山路兵一著　能力陶冶讀方の教育　大鐙閣(日)

友納友次郎著　讀方教授の主張と實際　目黒書店

河野清丸著　創作本位綴方教授の具體的研究(教育研究叢書第一編)(日)

奈良女高師兒童教育研究會編　尋常小學國語讀本取扱の研究　五冊　寶文館(上)

黒川延平著　鑑賞と吟味と訂正を主としたる綴方教授　大同館(上)

大正十年

五味義武著　綴方指導の實際　目黒書店(上)

丸山林平・田中豐太郎著　綴方教授の實際的新主張　大日本學術會(日)

油田佐吉著　綴方準備の新研究　大阪總島晟發行(上)

上島信三郎著　兒童の成績を通して見たる綴方缺陥とその救濟　隆文館(日)

山路兵一著　學校經營を背景とせる讀み方の自由教育　目黒書店(上)、(馬)

向島千代三編　小倉講演綴方教授の解決　目黒書店(上)

上島信三郎著　綴り方教授の經驗と感想　中文館(上)

同著　綴り方の缺陥とその救濟　隆文館(上)

吉岡停著　分量主義の讀方教授　成城小學校研究叢書第八編(上)

黒川延平著　鑑賞と吟味と書取を主としたる讀方教授　大同館(上)(馬)

奥野庄太郎著　今後の綴方教授　成城小學校研究叢書第八編(上)

田上新吉著　生命の綴方教授　目黒書店

諸見里朝賢・奥野庄太郎著　讀方教授の革新—特に漢字教授の實驗—　成城小學校研究叢書第廿編　大日本文華株式會社

友納友次郎著　私の綴方授　目黒書店(上)

遠藤早泉著　讀方教授思潮集成　隆文館(上)

大正十一年

高田邦彦著　人間味を根柢としたる國語教育　目黒書店(馬)

秋田喜三郎著　兒童中心國語の新學習法　明治圖書株式會社(馬)(日)

八波則吉著　讀本中心國語の講習　教育研究會(馬)

田中確治著　讀方教授の新主張及實際　大同館(上)

垣内松三著　國語の力　不老閣書房(馬)

加茂學而著　生命生長の讀方教育　南光社(上)(馬)
河野伊三郎著　文藝上の國語教育　目黑書店(馬)
帝國教育會編　綴方教授に關する最新研究上・下　文化書房
今泉浦治郎著　讀方教授の原理及方法　明治圖書株式會社(上
高田邦彥著　自我に芽ぐむ綴方教授原理　目黑書房(上)
峯地光重著　綴方新教授法　教育研究會(丸)
飯田恒作著　話方教授　教育研究會(丸)
峰地光重著　文化中心綴方新教授法　教育研究會
守屋貫秀著　綴方學習の指導　大同館(日)
黑田正著　童謠教育の實際　米本書房
芝野六助著　國語讀本の解剖と共れに立脚したる文の作り方及び其の教授　上篇　南光社(日)(馬)

大正十二年

佐藤隆德著　國語學習の心理と其の教授原理　(丸)
長谷川宥太郎著　實際的國語教授法　明治圖書株式會社(日)
高峰博著　兒童の言語教育　良書普及會(日)
中野八十八著　想の表現と筆の教育　南光社(日)(上)
坪內雄藏著　兒童教育と演劇　早大出版部(馬)
山路兵一著　讀み方の自由教育　明治圖書株式會社(丸)
赤阪清七著　國語教育編　イデア書院(日)(馬)
金子健二著　言語の研究と言葉の教授　東京寶文館(日)
中井新三郎著　讀方教授の新潮と實際　廣文堂(日)
塚本清著　學習指導を中心としたる讀方教育の實際　公文館(馬)

大正十三年

秋田喜三郎著　綴方學習と創作　明治圖書株式會社(丸)
上田杏村著　創作鑑賞教育論　(丸)
三川秀夫著　國語讀本劇化　(馬)
丸山林平著　生活表現と綴方指導　目黑書店
山本伊之助著　尋常小學國語讀本原據釋義　高知縣教育會(上)
田中豐太郎著　生活創造綴方教育　目黑(丸)
有富郁雄著　創作的態度への道程たる國語讀本の鑑賞　東京出版社(上)(日)(馬)
八波則吉著　第二國語の講習　教育研究會(丸)
今泉浦治郎著　韻文教授の原理と方法　寶文館(上)(馬)
佐藤隆德著　學習心理に立脚したる國語教授の改造　吉田書店(上)
千葉春雄著　兒童生活に即したる綴り方と其鑑賞　目黑(丸)(日)

千葉春雄著　童謡と綴方　厚生閣(丸

高時直之著　文學を透して修身的に見たる國語讀本と兒童の生活　熊本盛林堂(上)

八波則吉著　要義と創作　弘道館(上)

吉田助治著　兒童生活の藝術的陶冶と綴方の指導　内外教育社(日)

尾形義男著　自學中心主義讀方教育の理論及實際　三共出版社(馬)

奥野庄太郎著　綴方指導の原理と其實際　文化書房(上)

平田華蔵著　讀方學習の心理　モナス(丸)

白鳥省吾著　批評例國語讀本の詩の味ひ方　東京出版社(日)(丸)

飯田恒作著　綴り方の内面的研究　天地書房(日)

宮川菊芳著　讀方教育の鑑賞　厚生閣　(馬)

千葉縣鳴濱小學校著　新入學兒童語彙の調査　文化書房(日)

瀬谷直吉郎著　國語教授と眞教育　東京寶文館(上)

岩城準太郎著　表現と鑑賞　東洋圖書株式會社

佐久田昌教 四元尚孝著　藝術活動としての讀方原理　東京寶文館上

八波則吉著　讀本中心國語教育概説　教育研究社

河野伊三郎著　文の考察と國語學習　目黒書店

二瓶三郎著　綴り方教育鑑賞から創作人の指導　東雲堂(上)

大正十四年

飯島勝信著　讀本中心讀方學習指導の記錄　章華社(上)(馬)

宮川菊芳著　國語讀本韻文の鑑賞的取扱　目黒書店(馬)

由路兵一著　讀み方の自由教育　明治圖書株式會社(日)

鈴木源輔著　讀方自由教育の原理と實際　東京寶文館(馬)

丸山林平著　讀方教授の本質　目黒書店(上)(馬)

鳥越保太著　國語教授の考察及考査　教文書院(馬)

田中豐太郎著　兒童への文話　目黒書店(丸

飯田恒作著　兒童創作意識の發達と綴方の新指導　培風館(日)(丸)

加茂學而著　深みへの凝視國語鑑賞の心境　南光社(上)(馬)

福井保著　生活觀照としての讀み方學習の綴方　宮田文陽堂(上)(馬)

水島川安衛著　綴り方の自由教育創作と鑑賞　東京寶文館(上)

片谷童常著　童話教育の實際　日本學術普及會(馬)

友納友次郎著　國語教育の眞使命私の讀本教育　明治圖書株式會社(日)(馬)

増田榮著　綴方教育の心理學的基礎　教育出版社(上)

丸山林平著　國語教育と兒童文學　南光社(馬)(上)

吉田瑞三郎著　自由教育に基づく讀方學習書　東京寶文館(日)

秋田喜三郎著　發展的讀方の學習　明治圖書株式會社（文）
蓮賀長著　小學讀本を基調とせる國語綴話　東京寶文館（上）（馬）
森本厚吉著　話方の經濟　廣文堂發行
垣内松三著　最近國語教育の問題　明治圖書株式會社（丸）
鈴木頓雄著　魂の深化綴方指導と其の系統案　南光社（日）
秋田喜三郎著　讀方學習と創作　明治圖書株式會社（上）
木佐野亀之助著　個性に立脚したる新綴方教育の建設　（上）
守屋貫秀著　新綴方教育　三合社（上）
垣内松三・土方義道著　國語讀本文意の研究　不老閣（上）
峰地光重著　文化中心國語新教授法（上卷）―下・四・一二―　教育研究社
八波則吉著　讀本中心創作本位の文章法　教育研究會
五味義武著　讀方教授の刷新　目黒書店（上）（馬）
河野伊三郎著　國語學習上の諸問題と其の解答　大阪東洋圖書株式會社（上）
安藤専哲著　國定讀本に現はれたる宗教教材の解說　甲子社書房（日）
大正十五年
垣内松三・齋藤榮治著　國語讀本讀方教授の理論と實際　目黒書房（上）
芳瓜惠三郎著　低學年の國語教育　三友社（上）
佐藤德市著　生命の讀方教育　厚生閣（馬）
奥野庄太郎著　讀方學習の新研究　文化書房（上）
守屋貫秀著　綴方教育の辿るべき道　三友社（丸）
竹澤義夫著　讀方教育の新潮　寶文館（丸）（馬）
飯田恒作著　綴方指導の組織と實際　目黒書店
丸山林平著　讀方教育體系　目黒書店（上）
高田邦彦著　國語教育の根本問題　目黒書店（上）（日）（馬）
友納友次郎著　各課精說國語讀本の新使命　明治圖書株式會社（上）
山口勳著　更生の國語學習　明治圖書株式會社（上）
宮川菊芳著　現代讀方教育の實相と批判　厚生閣（上）（馬）
增田榮著　國語教育の心理學的基礎　教育出版社（上）
千葉春雄著　讀方教育要說　厚生閣（上）（日）
野澤正浩著　讀方教授の一進展　目黒書店（上）
芦田惠之助著　假名の教授　芦田書店
吉野作市著　國語讀本挿繪の精神及其解說　明治圖書株式會社（上）
河野通頼著　國語教育の修身的考察　厚生閣（上）
岩井良雄著　國語讀本國文學教材の解說　目黒書店（上）

飯田廣太郎著　讀方教育　札幌北海出版社(上

昭和二年

萬福直清著　文章と讀方教育との本質に即した讀本教授法精義　東京出版社(上

高橋喜藤治著　讀方教授の實際的新主張　モナス(丸)(馬)

山路兵一著　讀方の學習態度と其の建設　明治圖書株式會社(上)(丸

秋田喜三郎著　修訂國語の新學習法　明治圖書株式會社(丸)

池田こぎく著　文の指導と其教室經營　明治圖書株式會社(丸)

佐藤徳一著　心と言葉の融合點に立つ讀方教育　目黑書店(丸

秋田喜三郎著　修訂創作的讀方教授　明治圖書株式會社(丸

山口勳・小島貞三著　行の解釋から表現へ讀方　明治圖書株式會社(丸)

田上新吉著　讀方指導原論　目黑書店(丸)

友納友次郎著　國語讀本の體系—讀本は斯うして出來てゐる—形態論　明治圖書(馬)

秋田喜三郎著　讀方問題の基調　明治圖書株式會社(丸)(馬)

金子彦次郎著　三元的國語教育へ　明治圖書株式會社(丸)

垣内松三著　國語教授の批判と内省　不老閣(日)

同　著　最近國語教育の問題　明治圖書株式會社(丸)

淺山尙著　綴方教授の根本問題　明治書院(上)

永木梢譯　ヒユエイ讀方新教授法　モナス(上)(日)

木下一雄譯　ヒユエイ讀方の心理學　モナス(上)

山路兵一著　生活創造の讀方學習要領　明治圖書株式會社(上)

万福直清著　現今讀方教育の破壞と建設　東京出版社(馬)

宮川菊芳著　態度馴致の讀方教育　厚生閣(上)

昭和三年

奥野庄太郎著　心理的科學的の讀方教育　(丸)

秋田喜三郎著　綴方新學習法　(丸

河野伊三郎著　讀方學習の展開　明治圖書株式會社(上)

八波則吉著　第三國語の講習　教育研究會(丸)

丸山林平・千葉春雄・宮川菊芳・田上新吉・五味義武・池田小菊　現代綴方教育大觀　南光社(丸)

齋藤榮治著　辨證法的國語學習　厚生閣(日)

五十嵐力著　國語の愛護　早大出版部

丸山林平著　國語教授の新潮と實際

奥野庄太郎著　聽方教育の原理と實際　東洋圖書株式(馬)(丸)

高橋喜藤治著　讀方學習指導要領　郁文書院(馬

齋藤榮治著　國語教材内觀の方法　厚生閣(上)

馬淵冷佑著　讀方教育の本質と其の實際　國民教育奬勵會（丸）

鈴木頓雄著　學習法の建設と文創作の指導　南光社（上）

高橋喜藤治・丸山林平譯　スターチ、綴方の心理學　郁文書院（上）

友納友次郎著　將來の綴方教育　明治圖書株式會社（上）

奥野庄太郎著　話方教育の原理と實際　東洋圖書株式（日）（上）

宮原義徳著　創作鑑賞上の綴り方　厚生閣（上）

内田彌三郎著　聽き方話し方解說　佐賀圖書刊行會（上）

飯田恒作著　綴方の本質と指導の實際　郁文書院（上）

山口猪祐著　兒童の創作意慾に出立したる綴方教育の實際　秀文館（上）

千葉春雄著　生活させる綴方指導　厚生閣（上）

昭和四年

丸山林平・宮川菊芳著　文に即したる指導各學年の讀方教育（丸）

河野伊三郎著　綴方學習上の諸問題（丸）

佐藤末吉著　文旨成長讀方指導の過程　明治圖書株式會社（馬）

池田小菊著　子供と綴方教育　明治圖書株式會社

大貫三藏著　新教育原理に基く讀方教育の實際　明治圖書株式會社（馬）

石黒魯平著　國語教育の基礎としての言語學　明治圖書株式會社（日）

千葉春雄著　表現の讀み方　目黒書店（上）（馬）

佐藤徳市著　國語の本質とその教育　厚生閣（馬）

丸山林平著　讀方教育論考　明治圖書株式會社（日）

河野伊三郎著　生活な文學への綴方指導の實際　モナス（上）

五味義武著　綴方教育の刷新　目黒書店（上）

久米井束著　樹は如何にして自ら潑溂として天に伸びるか　誠明堂（上）

西原慶一著　綴方新教授原論　教育研究會（上）

今泉浦治郎著　作業型讀本教授の新研究　明治圖書株式會社（日）

垣内松三・中島徳三郎著　讀方教育の現象學的研究　明治圖書株式會社

高田邦彦著　國語教材の現象學的考察　明治圖書株式會社（上）

宮川菊芳著　讀方教育の新潮と實際　明治圖書株式會社（馬）

西尾實著　國語國文の教育　古今書院（上）（馬）

三輪一男著　國語教育の正道　山口縣同人發行（上）

昭和五年

神保格著　國語讀本發音とアクセント（丸）

田村眞道著　使命實現國語教育の本義　大阪盛文館（上）

馬淵冷佑・矢田枯柏著　小學校に於ける俳句の作らせ方味はせ方　郁文書院（馬）

佐藤末吉著　社會に生きる讀方教育新機構　目黑書店(上)(馬)

甲斐豐著　形相直觀の讀方教育　人文書房(上)(馬)

河野伊三郎著　國語教育を語る　同　(上)(馬)

千葉春雄著　綴方科教育問題　厚生閣

田中豐太郎著　綴方教育の理論と實際　明治圖書株式會社

原田直茂著　讀方教育の本領　目黑書房(上)(馬)

秋田喜三郎著　全高等小學讀本の本質的研究　明治圖書株式會社(上)

田上新吉著　力の讀方教育　目黑書店　(附中)(上)

守屋貫秀著　讀に中心　讀方成績考査法要領　郁文書院(上)

奥野庄太郎著　心理的讀方の實際　文化書房(上)(附中)(日)

佐藤熊治郎著　教授方法の藝術的方面　目黑書店

志垣寛著　最近の文學と綴り方教育　厚生閣

西尾實著　國語教育の諸問題　國文學講座第十九　實踐講座刊行會(上)

宮川菊芳著　讀方科教育問答　厚生閣(馬)

山宮精藏著　表現に生きる讀方教育の實際　啓文社(上)

昭和六年

高橋克已著　本格に即せる讀方教育體系　(丸)

大澤[illegible]休著　口頭綴方の實際　(丸)

西原慶一著　形象直觀讀方教育の原理と實際　人文書房(上)

小林好太郎著　國語教育の眞諦　三省堂(上)

友納友次郎著　教材觀の源泉　讀本の本質的發生的研究　同文書院(上)

山路兵一著　讀方學習態度の段階的指導　明治圖書株式會社(馬)

加茂學而著　行に立つ讀方教育　南光社

中澤信次著　國語教育の哲學的基調　文章院(上)

大西伍一著　郷土讀本の編纂法と其實例　第一出版協會(上)

佐々井秀緒著　新文話と綴方教育　厚生閣

佐藤徳一著　形象の讀方教育　厚生閣(上)(馬)

佐藤末吉著　社會觀照現代讀方教育　人文書房(上)(馬)

田中豐太郎・丸山林平著　綴方教授の實際的新主張　日本書院

田中豐太郎・成田敏夫著　國語教材文學史的考察と取扱の實践　人文書房

田中豐太郎著　綴方教育の分野と新使命　郁文書院

佐藤末吉著　讀方教育の分野・新使命　郁文書院

宮川菊芳著　鑑賞指導國語教育論叢　人文書房

三浦圭三著　新文章作法講話　文光社(上)

田卷素光 信勝確郎著　尋常小學國語讀本研究の新資料（卷ノ十・十二）　大正書院（上）

宮川菊芳著　國語科要旨の批判と解說　厚生閣

滑川道夫著　文學形象の綴方教育　人文書房（上）

昭和七年

金子彥二郎著　まことの國語教育（文）

立川昇藏著　鄉土より見たる國語教育（丸）

武藤要著　國語教育診斷（丸）

大井修著　形象原理に立つ讀み方の教育（丸）

千葉春雄著　兒童文の批評と鑑賞と文話と觀方の研究（丸）

綿貫數夫著　國語讀本の研究（丸）

土屋康雄著　讀方教育（丸）

坂本豐著　讀み方力成長の教育（丸）

秋田喜三郎著　讀方教育の新相（丸）

谷口武著　綴方教育原論（丸）

金子好忠著　低學年の綴り方（丸）

射手矢貞三著　國語愛の讀方教育（日）　明治圖書株式會社（上）

馬淵冷佑著　讀方教育の體驗　松井博士古稀記念文集

甲斐豐吉著　陶冶の本義に立脚せる讀方學習指導體系　人文書房（上）

土屋康雄著　讀みに生きる讀み方教育　教育實際社（上）

今泉浦治郎著　國語教育の礎石 言語の本質及機能　明治圖書株式會社（上）

古見一夫著　形象原理に立つ綴方教育の實際　厚生閣

谷村四郎著　綴方教育技術研究　曙社（上）

大澤雅休著　體驗を語る綴方の諸問題　日本教育研究會（上）

中島德三郎著　新讀方教育體系　教育實際社（上）

鄉土主義の綴方教育　文化書房（上）

宮川菊芳著　社會生活人への讀方教育　明治圖書株式會社（上）

澁谷專助著　土に芽ぐむ綴り方 指導文三百題　教育實際社（上）

玉井幸助著　教育と國文學　中文館

川村章著　實用的綴方教育　厚生閣

友納友次郎著　讀方教育原論　明治圖書株式會社

田中豐太郎著　綴方指導系統案と其實踐　寶文館（上）

關厚著　新文討論と其實際　文泉堂（上）

淺黃俊次郎著　國語教育の精髓（作業主義）　目黑書店（上）

秋田喜三郎著　讀方教育の新相　目黑（上）

坂本豐著　讀み方力成長の教育　明治圖書株式會社（上）

坂本豐著　國語教育の新機構　目黑書店（上）

武藤要著　國語教育診斷　厚生閣（上）

谷口武著　綴方教育原論　玉川學園發行

本庄鎌次郎著　言語の機構と讀方教育　文泉堂（上）

丸山林平著　國語教育學　厚生閣（上）

保科孝一著　國語教育を語る　育英書院（上）

海老原邦雄著　算術・讀方に關する教育的測定　日本書院（上）

小松寛著　實踐の形象（國語教育）　帝國教育研究協會（日）

森本安市著　辨證法的讀方教育　厚生閣（上）

日下部重太郎著　朗讀法精説　中文館（上）

金子好忠著　低學年の綴り方　（上）

石川太一著　教育の大觀と教案の書き方　高踏社（上）

西原慶一著　實踐國語教育學　南光社（上）

石川太一著　讀方と算術教育の鳥瞰と批判　高踏社（上）

昭和八年

八波則吉著　國語教育大道　東洋圖書（上）

河野伊三郎著　國語教育新論　東洋圖書株式會社（上）

川口半平著　生活開發の綴方教育　厚生閣（上）

西原慶一著　綴方教育の新形態　教育研究社（上）

櫻井義村著　小學國語讀本教育書（教材精説　日案式）　教育書院（上）

淺黄俊次郎著　新小學國語讀本指導精説（卷一）　南光社（上）

佐藤末吉著　中學年の讀方指導　明治圖書株式會社（上）

加藤因著　綴方指導の話（教育大衆に寄する）　文錄社（上）

西山庸平著　綴方心理學　厚生閣（上）

宮川菊芳著　小學國語讀本教育（尋常科用卷一）　明治圖書株式會社（上）

秋田喜三郎著　小學國語讀本指導書（卷一）　明治圖書株式會社（上）

田中豐太郎著　小學國語讀本の實際的取扱（改正）（尋常科卷一）　目黑書店（上）

友納友次郎著　新讀本の指導精神（教法精説）（尋常科卷一）　明治圖書株式會社（上）

竹澤義雄著　新讀方教育原論　同文書院（上）

昭和八年七月十五日印刷
昭和八年七月十九日發行

國語科學講座
（第二回配本）

東京市神田區錦町一丁目十番地
編輯兼發行者 株式會社 明治書院
代表者 三樹退三

東京市神田區三崎町三丁目八十九番地
印刷者 細谷祐三

發行所 東京市神田錦町一丁目 株式會社 明治書院